
上賀茂神社 ~ 禊 ~

不動啓人

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

上賀茂神社と襖

【Nコード】

N2875E

【作者名】

不動啓人

【あらすじ】

京都の上賀茂神社を訪れた敏夫と早紀江の夫婦。櫛の小川で襖の感覚を味わった早紀江の想いは……。。

(前書き)

京都にて良い思い出を残す為の切っ掛けとなるかもしれない物語を
小説という形で表現しております。

「なんだよ、お前。いきなり買うのか？」

「いいじゃないの。ほら、早く、早く」

早紀江は呆れる敏夫としおの手を引き、上賀茂神社かみがもじんじやの手前を左に折れた。そのまま少し行けば、焼餅で有名なお店がある。

早紀江はテレビでその存在を知って以来、上賀茂を訪れたならば必ず寄ろうと決めていた。敏夫もそれは承知していたが、まさか着いて早々に向うとは思っていなかった。我が妻ながら、その食い意地に首を傾げたくなる。

お店に入り、十個の焼餅を購入した。締めて千二百円。

「五個も食うのか？」

「なに、その顔？このぐらい、あつという間よ。それよりも、早く食べよ」

「ここで食うのか？」

「違うわよ。上賀茂神社内で」

「おいおい、神域で食うのか？」

「もう、食うのか、食うのかつて。神社内の川縁で食べるお握りは、格別だつて言つてたのは、誰よ？」

「……参つたなあ」

「さあ、行った、行った。温かい内に食べた方が美味しいわよ」

草野夫婦くさのは、上賀茂神社に足を踏み入れた。

上賀茂神社は、京都でも最も古い神社の一つだ。別雷神わけいかずちのかみを祀り、

五穀豊穰ごこくほうじやう国土守護の神徳を持つ。世界文化遺産に指定され、京都三大祭の一つ『葵祭あおいまつり』でも有名だ。

境内では神域からの流れくる御手洗川みたらしがわと御物忌川おものがわが合流し、櫓ならの小川となつて南方に下っていく。

夫婦は正面駐車場の方に回り、砂利を踏みつつ、一の鳥居の前に立った。

朱の巨大な鳥居。左右に高い樹木を配し、覗くは白砂の、二の鳥居へと続く一本道。潜れば、芝生の広場。

水彩の筆をとる老人。バトミントンに興じる姉妹。風景を楽しむ観光客。樹木の下にシートを広げて寛ぐ若い親子。幼子が走り、親は目を細める。

早紀江も目を細めた。時の流れるのは、早いのか、遅いのか。親子の姿にかつての自分を見ているような気になった。

夫婦の子は二人あったがすでに成人し、親の手からは離れていた。お陰で二十数年振りに、こうして夫婦水入らずで旅行に出掛けられる。

京都には新婚当時に二人で来たことがあった。けれど、その時は観光シーズンに重なってしまったため、人の波に揉まれた記憶と、夕食のために入った店でオムライスを食べた記憶しかなかった。

その後、敏夫は仕事の関係で京都は何度か訪れていたが、早紀江に機会はなく、今度望んで旅行先を京都とした。早紀江にとってはリベンジだ。京都を楽しみ尽くそうという想いでやってきていた。

外幣殿を右手に見ながら進み、二の鳥居を潜る。すると、広場の開放感とは違った厳粛な雰囲気か漂っていた。高い木々がもたらす静寂のためか。

配された建造物。正面の拝殿前には立砂と呼ばれる円錐形に盛った砂山が二つ立ち、その頂上には二三本ずつ松葉が刺さり、風に靡いていた。一種の神籬ひもぎ（神様が降りられる憑代よりしろ）らしいのだが、好奇心と美しい造形に、特に二人の目を引いた。

拝殿の後方には御手洗みたらしがあり、記された作法通りに、二人はまず右手に杓を持って左手を洗い、続いて右手を洗い、次いで左手に水を受けて口を漱ぎ、最後にもう一度左手を洗い、杓を置いた。水の清涼感に清め感覚を実感する。

岩を二枚渡した小さな樟橋くすのきはしを渡り、廻廊を左手に行くと、やがて朱に鮮やかな楼門に辿り着く。楼門を潜れば、四脚中門の先に本殿が覗く。

二人は賽銭を投げ、二礼にて神に敬意を示し、二拍手の内に願いを込め、一礼にて成就を祈った。

参拝を終え振り向けば、中門の朱に森の緑、空の青。本殿に鎮座する神の見ている風景。

体感する視線。鎮まる心を受取る。

「私、ここからの景色が一番好きかもしれない」

「そうだな。風情ってやつがある」

恐れ多くも、神の心理を散策する。

中門を抜け、カタカタと風に鳴る絵馬のざわめきを耳にしつつ、歴史重層な屋根を冠した片岡橋を渡り、片山御子社を拝し、葵祭の際に宮司が勅使に対して返祝詞を申す、岩上と呼ばれる洗濯板のような波状の大岩に感心する。櫛の小川に沿って苔むした丘裾を左手に、木漏れ日を浴びつつ、木々を眺めつつ、涉溪園しよつけいえんを回って、二人の姿は再び櫛の小川と交差する。

芝生の広場へと出る橋を渡り、その袂で早紀江は敏夫の腕を再び引いた。

「さっ、境内を満喫したことだし、焼餅も満喫しましょ」

川への階段に腰掛け、早速鞆から焼餅の包みを取り出した。

「妙に感心していると思っただけ、それは忘れていなかったんだな」

「当然でしょう。神社は神社。これはこれで感心するの」

包みを開けると、中心に満月が浮かび上がったような焦げ目正しい餅が四つ並んでいた。紙を挟んで、下に六つ並んでいる。

早紀江の手がいち早く伸びる。指から伝わる柔らかい餅の感触。軽く摘み、口へと運ぶ。

啜えた瞬間、舌が焦げ目に触れ、なんとも言えぬ甘みが舌に広がった。香ばしい甘さ。餡子の甘さもくどくない。

「美味しい」

早紀江は、早くも二つ目に手を伸ばした。

敏夫も頷きながら、二つ目に手を伸ばす。

耳を打つは小川のせせらぎ。頬を撫でるは薫風。爽やかな時の流れが、小川の流れと共に、風と共に去る。

遠く一羽の鴉が水浴びをしている。近く、母親に背を守られた幼子が小川に手を浸し、不思議そうに水を撥ねる。

木々の根は縦横無尽に力強く大地に噛み付き、旺盛な茂りを緑の濃淡に示していた。

木陰の涼しさは、天地和解の涼しさ。抑圧を受けない自由開豁な涼しさ。

「ああ、美味しかった」

安らぎの環境に、美味。早紀江は五つの焼餅をあつという間に平らげてしまった。敏夫も最後の一口を含み、口を尖らせ惜しむように味わう。

包みを鞆にしまい、代わりにペットボトルのお茶を取り出して、口内を潤した。

「あなたの言った通り、凄く贅沢な気分」

「だろ？ここで食べると、一味も二味も変わってくる。気分がいいんだ」

二人はこの一時に満足していた。日頃の苦勞が、一掃される想いだ。身も心も、この清廉な環境に委ねる。いつまでもこうしていたい気分になる。

だが

「さつ、そろそろ次に行こう」

観光の悲しいところは、時間に余裕がないこと。ましてや、京都のような名所の多い地では。

早紀江はもう少しここで過ごしたかったが、予定を大きく狂わす訳にもいかず、立ち上がった。ただ、手に付いた焼餅の粉を洗いかつたので、川縁にしゃがみ込むと、手を小川の水に浸した。途端、えもいわれぬ清涼な陶酔感が水に浸した手を覆い、やがて流れのままに己の存在が流されるようで、まるで我が身が透けていくような感覚に囚われた。

早紀江は思い出す。夫に教えられた、葵祭にての行事を。齋王代さいおうだい・
女人列御禊神事にょにんれつみそぎしんじと呼ばれる清めの儀式。十二単を纏った女性が、御
手洗川に両手を浸して禊みでを行う。

確か説明書きにもあった。上賀茂神社の謂れである玉依姫たまよりひめが川遊
びをしていた御手洗川を、瀬見の小川禊の泉、と。

早紀江の内側から、何かが流れ出していくような気がする。それ
は穢れか。

「あなたも、どお？気持ちいいわよ」

早紀江は夫を誘った。

敏夫は誘われるまま、早紀江の隣に座り込み、両手を水に浸した。

「おお、冷たいなあ」

早紀江には見えていた。透明な水面に流れる過去を。我が人生。
そして夫との日々を。

思えば、この人と結婚してから三十年になろうとしている。人生
の半分以上をこの人と過ごしてきた。

色々なことがあった。喧嘩もしたし、嘘を吐いたこともある。話
さずに秘密にしていたこともある。それら後ろめたい気持ちだが、今
流れていつているような気がする。

敏夫の手を見る。果たして、その手からも流れるものがあるのか。
きつとあるのだろうか。けれど、今となつては過去のこと。流れるま
まに、洗われて欲しい。

子供が独立してまた二人。改めて、この人と歩む区切りの時。

早紀江は敏夫の手を取った。

「なんだ、どうした」

照れ笑いを浮かべる敏夫に、早紀江は微笑む。

「これからも、よろしくね」

禊をもつて、新たな契りとなることを早紀江は願った。

小川の流れは、きつとどこまでも流れて夫婦の穢れを浄化してく
れるだろう。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2875e/>

上賀茂神社～襖～

2009年3月24日09時51分発行